



# 男は 痛い !

國友万裕

第15回

ハッシュ!

## 1. ゲイって、何???

本を出してから、俺のことを最初からゲイだと思って、近づいてくる人がでてきた。俺は「ゲイだ」とカムアウトした覚えはないし、俺の単著2冊もゲイに特化した映画の本ではないのだけど、ゲイを匂わせる画像や言葉が表紙についているから、自動的にゲイだと思ってしまう人もいるのだろう。

先日、ある若い男性からゲイであることをカムアウトされた。彼は俺の本も図書館でじっくり読んでくれていて、一緒に食事をする事になったので、俺の著書2冊プレゼントしようかと思ったのだが、親にはまだカムアウトしていないから、家に置いておくのはまずいと言われてしまった。ストレートの人だったら、むしろ気にせず、もらってくれるのだろうが、ゲイの人だと、そのことを意識しているため、ゲイの臭のするものは、遠ざけておかないと周りに気づかれるという心配があるみたいだ。

しかし、俺はゲイなのだろうか？俺は否定も肯定もできない。彼から、「パートナーはいるんですか」と訊かれ、「いや、俺は、ゲイというよりも女性恐怖なんだよ」と答えた。

この連載で繰り返し、書いてきた通り、俺は大きなトラウマを複数の女性たちに負わされているため、どうしても女性を許すことができない。ただの友達としてつきあうのはOKだし、むしろ、周りの女性たちは、俺を普通の男よりも話ししやすいとは思ってくれている。先日、「あの人、男か女かわからないし、気持ち悪い」と俺のことを評している女性がいると聞いて、憤慨して、訴えてやろうかと思ったが、俺が、しばしば、男のことをわか

っていない女性たちからそういうことを言われるのは、男の割には表出的だからである。普通の男は顔に感情を出さないし、愚痴だつてこぼさない。だけど、俺はありのままの自分を晒すことに躊躇しなくなっている。

しかし、そのことが女性的だと感じるのは、女性の思い違いである。2年前に入院した時のことだ。翌日に全身麻酔の手術をするので、俺は怖くて、色々な友達にメールして、愚痴をこぼした。すると、一人の友達から、「怖い時に怖いと言える國友さんは男らしいですよ」という返事が来た。普通の男たちは、怖くても怖くないふりをする。そして、それは決して男らしさではなく、虚勢なのである。男は、虚勢をはるやつなんて男らしくないことは、皆わかっている。しかし、女は男の身になって考えないから、そのことに気づいていないのだ。虚勢をはる男は強いんじゃない！ 悲しいんだよ！！ わかってくれ、女性たち！！

さて、ゲイって何なのだろう？ 俺は、前にある学会の他の会員の人たちにゲイの定義の部分で理解してもらえなかったことがある。他の人たちは、どうやらストレートとゲイとは違った世界とされていて、俺の説は、両者を混同していると感じているみたいなのである。しかし、それはちょっと違うのでは？ ストレートとゲイは違った世界では決していない。

この本で何度も書いたが、俺を不登校へと追い込んだ一人は、中学3年の時の暴君のような体育教師である。この先生は、男子生徒全員に、上半身裸で体育の授業を受けることを強いた。真冬の厳寒の時期にである。他の男子たちは素直に従っていた。しかし、俺は

どうしても従うことに抵抗があったので、自分はオカマなのだと思っていた。あの頃はゲイという言い方は定着していなかったし、オカマの人というと女性的な人というイメージだった。俺は裸身を強制されることに抵抗があった。男らしいことをするのに抵抗を感じるのは、俺は男じゃないからで、だから俺はオカマなのだと思っていた。

今思い返せば、他の男子たちも抵抗があったやつは多かったはずだ。しかし、番長のような、体育系の男の先生から威圧されれば、それに従うしかない。男は自分が男ではないと思われるのが一番怖いのである。

また、この教師のしていることは、今となって考えれば、ゲイである。鍛錬の名の下に、男子全員を裸にしようとする。それは男子への陵辱である。この男性教師は性格的にもドマッコである。自分の欲望のために、他の連中を威圧し、支配し、屈辱を与え、トラウマを負わせることをなんとも思わない。しかし、彼のしていることは、きわめてゲイ的なのである。今となっては、裸を誇示する男性は、ゲイのステレオタイプだ。

3年ほど前に、ある男の人に話したことがある。「自分が男だということを疑ったことないですか」と。すると、その男性は、「男に恋したことがあったとしたら、疑っていただろうね」と答えた。男って、なぜ、こういう勘違いをするのだろうか？？？ この考えは明らかに間違いだ。ジェンダー（男らしさ・女らしさ）とセクシュアリティ（異性愛・同性愛・両性愛）は別物である。性格的に男らしい人が、異性愛とは限らないし、むしろ、男らしさを追い求める人は、女よりも男の方が魅力的だと思っているわけで、むしろ、男らしい

人＝ゲイ的と考えた方があっているのだけど、多くの男たちは、男らしい人＝異性愛というとんでもない間違いをおかしてしまっているため、異性愛者であることを誇示しようとするのである。

## 2. 肉体関係をもつまではゲイ

しかし、この状況は徐々に変わっていくだろう。このところ、ハリウッドの男優たちも自分がゲイだということをカムアウトし始めた。『ホワイトカラー』というテレビ映画の主演で有名なマット・ボマーは、文句ないイケメンだけど、堂々とゲイであることを公言している。彼は、今年のゴールデン・グローブ賞で助演男優賞を獲得し、波に乗っている。今年のアカデミー賞の司会者ニール・パトリック・ハリスも、ゲイであることをカムアウトしている。

最近では、映画『ミルク』『127時間』などで人気絶頂のジェームズ・フランコが、ゲイの噂に対して、面白いコメントを発表して、これは俺の考え方と似ているなあといっぺんにフランコのファンになった。海外ドラマナビ

<http://dramanavi.net/news/2015/03/post-3533.php>というサイトから、引用したいと思う。

米同性愛誌「FourTwoNine」3月号で表紙を飾ったジェームズが、ゲイのジェームズによるストレートのジェームズへのインタビューという形で取材に応じた。ストレートのジェームズがゲイのジェームズに向けて、“お前はゲイなのか？”と直球質問を投げかけると、「芸術におい

てはゲイだけど、普通の生活ではストレートだって思いたいね。普段の生活でも肉体関係を持つまではゲイだけど、まあストレートだと思ってくれたらいい。ゲイをどう定義するかによるね」と、かなり複雑な答えが返ってきた。

さらに、「誰とセックスするかって話になると、僕はストレートだ。1920年代や30年代には、ホモセクシャルはセックスの相手ではなく、どう振舞うかで定義されていた。水兵は男とやってたけど、男らしく振舞っていたからゲイだとは思われていなかったからね」と、ジェームズ独自のゲイ理論を展開。彼は同性愛を匂わすことで、人々が“ジェームズ”という人間を簡単に特定できない今の立場が気に入っているとも付け加えている。役者という様々な役柄を演じる仕事をしているだけに、ジェームズは自分の存在を明確に定義づけしたくないのかもしれない。

まさしく同感である。俺も、フランコと同じで、「肉体関係をもつまではゲイ」である。俺は、今まで一度も男の人と肉体関係をもったことはないし、今でもアナルセックスやフェラチオなどをしたとは思わない。しかし、精神的にはゲイだと思う。女といるよりも男といる方が楽しいし、男の人と風呂やプールで裸の付き合いをするのはすごく好きだ。

N先生とも昨年の秋、初めて一緒にお風呂に行った。教え子の男の子とも、彼の卒業を祝して一緒に船岡温泉に行った。ベストフレンドとは、もう14年のつきあいだが、彼とは互いに風呂好きということもあって、数え切れないくらいの回数風呂にいつている。その

ほか、親しい男性とは大概是風呂に入っていて、お互いに裸になると、友達になった気持ちになる。もちろん、男にもよる。嫌いな男の人と、風呂に入ったり食事したりしても楽しくはないが、仲のいい人だとたまたま楽しく。これはストレートの人が女性を相手にする場合でもそうだろう。一般に男はセックスの対象の射程範囲が、女性よりも広いことは確かだろうが、それでも、男にも好みというのはあって、どうしても嫌いな女性はいるのである。

俺は、男性の裸を見る時、大概是胸板を見ている。俺は裸の上半身には憧れる。しかし、一方で、ペニスはほとんど見ていないし、見たいとも思わない。俺はあくまでも、男として男と付き合うのが好きなのだ。友情の延長が好きなのだ。男同士の友情の映画は、男同士で上半身裸になる場面が必ずと言っていいほどあるが、俺はそれが好きなのである。ゲイのカップルのなかには、片方が男役、もう一方が女役というカップルもいて、女役の方が女装したりするケースもあるが、俺はあくまでも男同士で付き合いたい。

女性と付き合うよりも、男同士の方が気楽である。女性とつきあうと、男は責任をとらなくてはならないという気持ちになってくるし、子供なんかができたらなおさらである。しかも、女性は一般に、一人の男性と対になるようにするので、恋人ができてしまうと、ほかの女性との付き合いは制限しなくてはなくなる。しかし、男同士だったら、何人と付き合っても、そのことでとがめられることはない。子供が生まれる心配もない。経済的保証もしてあげなくていい。男と女がトラブルと、女に非がある場合でも、男の方が

悪いような目で見られる。男は被害者にはなれないのだ。あれこれ考えると、男同士の方がはるかにメリットは大きい。デメリットは、子供ができないだけのことだ。

女性の方が悩みを聞いてくれる、周りの世話をしてくれると思っている人もいるみたいだが、俺が親しくしている男たちはきちっと悩みを聞いてくれる男性たちである。俺は、30年以上も一人暮らししているから、周りの世話なんてして欲しいとは思わない。それに、一般的に言って女性は余計なことを話し過ぎるし、人の悪口を言い過ぎる。この人は好きだ、あの人は嫌いだ、あの人はカワイイ、この人はキモい、とあれやこれや感情レベルで男を物色する。女同士でやってくれるのであればかまわないが、そういう話を聞かされると、俺はその女性が嫌いになってしまう。俺は、女性から、散々、「キモい、嫌いだ」と言われ続けた男なので、いやな思い出が蘇ってくるのだ。悪いことをしているわけでもないのにキモいと言われるのは、男にとっては大変な屈辱である。好きや嫌いに理屈はない。彼女たちがキモいと感じるのは、俺の問題ではない、彼女たちの感じ方の問題なのである。

### 3. セックスだけがゲイじゃない！

この頃、ネットなどを見ていると、ストレートなのだけど、女性とセックスはしたくないという男性の悩みが語られていたりする。それに理解を示す女性も多いようだ。女だって、したくない人はいるから、そういう人を探せばいいじゃないのと。

ゲイを語る上での一つの問題は、セックスと同性愛を混同しているということなのでは

ないか。これは、そもそも、男性の同性愛を同性愛の基準としてとらえているがゆえに起きることでもある。例えば、昨年、『アデル、ブルーは熱い色』というレズビアン映画が話題になった。作品の評価も高く、何よりも画期的だったのは、女性同士のベッドシーンをたっぷりリアルに見せているところだった。男の同性愛の映画の場合は、必ず、セックスシーンや裸の場面が出てくる。しかし、女性同士のものはアカデミー賞にノミネートされた『キッズ・オールライト』にしても、必ずしもそういう描き方にはならない。男性はセックスがプライオリティだが、女性はコミュニケーション重視であることはまだまだ事実なのだろう。

現実レベルで考えても、レズの女性の場合は、自分の同性愛性に気づいていない女性が多いと聞いている。男は身体が先に反応するから、自分が同性愛だということにすぐに気づくが、女性は肉欲は後からついてくるので、精神的に満たされるのならば、身体の関係はなくてもかまわないというレズビアンは多いとのことである。したがって、女性の基準にしたがって同性愛を定義するのであれば、セックスのない男同士のつながりも、精神的につながっていれば、同性愛ということになる。先にあげた通り、この頃は異性愛でもセックスしたくない男性が増えているのだから、セックスするかしないかを基準にして、同性愛を考えるのはもう古いのである。

#### 4. ゲイになるのも悪くないか

俺も、この際だから、完全にゲイになってしまおうかと思うこともある。

この頃、ゲイになってしまったほうが、むしろ特典も多いのではないかと思うのである。まず、「なぜ、結婚しないの」と聞かれなくなる。俺の場合は、女性恐怖症だからなのだが、女性恐怖というのは理解してもらえない。女の人でも、少女時代に男に陵辱されて、男全体に偏見を持っている女性は大勢いる。そういう女性に対しては、世間は同情的だ。しかし、逆の場合は同情してもらえない。おそらく、世間の人たちは、女性が男性にトラウマを負わされるのは深刻なことだけど、逆は大して深刻な問題ではないと思ってしまう。

俺は、自分のトラウマをわかって欲しくて、男性運動にまで参加してきたのだが、フェミニストはあれだけ怒って、男を糾弾するのに、男性運動の場合は、フェミニストから反発されることを恐れて、なかなか女性を批判することができない。俺は、別にフェミニズム反対ではないし、男が悪くないとは言っていない。ただ、女も悪いところはある、男を傷つける場合はあるのだと言っているだけのことなのに、ちょっとでも女性を批判すると、フェミニストたちは激しく反発する。男の人は見えない権力を握っている、男社会ですよ、というのが彼女（彼の場合もある）たちのエクスキューズだ。現実には、権力握れる男なんて一握り、下層の男はたくさんいる。そのことは子供にでもわかりそうなものなのに、彼女たちは、「女に責任はない理論」をふりかざそうとする。被害者の権力を乱用しようとするのである。一昨年の援助学会の大会で、ある若い男性から、「女性を糾弾するにはどうしたらいいのですか？」と質問された。やはり、女性を批判したいけど批判できないもど

かしさを感じている男性は、今はたくさんいるのだと痛感したのだった。

いっそのこと、ゲイになってしまえば、女性に抗議しやすい。ゲイは女性よりも差別されているし、偏見の目で見られる。政治家や管理職でゲイとカムアウトしている人は、女性の政治家や管理職よりも少ないだろう。ゲイだったら、「俺たちは被害者だ、俺たちに責任はない理論」を女性に行使することができるはずなのである。

## 5. ゲイが社会を変える。

去年、カウンセリングを受けてあやうくその女性カウンセラーと喧嘩になりかかったことは、この連載にも何度か書いた。彼女との面談を思い出すと、今でも溜飲があがってくる。

例の裸を強制された経験を話した時に、彼女は、「上半身裸になるのが好きな男もいるじゃないですか」と返してきたわけだが、なぜ、カウンセラーが、こんな安直な返し方をするのだろうか。不登校の子に、「学校に行くのが好きな子もいるじゃないですか」と返せば、不登校の子は余計に傷つくだろう。それくらいのことかなぜ、わからないのか。彼女は、男を相対的に考えたことがないのだろうか。若い女性のなかには、冬場にミニスカートや胸のあいたような格好をして闊歩している女性はたくさんいる。ほとんど水着同然である。彼女たちが好きで、ああいう格好をするのは彼女たちの自由であるが、もし、強制的にすべての女にそういう格好をしろと先生が命じたりしたら、それは大問題なのだ。しかし、男の場合は、それが問題とはされない。あな

た、男には性的羞恥心がないと思っているの？ 身体にコンプレックスをもっている男だっていっぱいいるし、女性の前で男が裸になるのが恥ずかしいと思うのは当然のことなのだ。

もちろん、男には裸になるのが楽しい時もあるが、それはモード次第である。大学の頃だ。自宅生の友人から、「下宿のやつはいいなあー。上半身裸で寝ることだってできるしなあ。自宅だと、自分の部屋であっても、母親や妹に入ってこられる可能性があるからなあー」と言われたことがある。彼は体育会系なので、見事ないい身体だ。その彼であってもそういうのだ。まして、女の腐ったと言われるようなタイプの男子が、脱ぐのが平気だと思っているのだろうか。

女性差別や女性批判にはフェミニストがついているが、男性にはオンブズマンがいないため、男であるがゆえに不当な扱いを受けても、誰も理解してもらえない。

あの女性カウンセラー、今頃、どうしているだろうか。俺のことをいやなクライアントだったと思っているだろう。彼女は、30代半ばだ。この世代になってくるとフェミニズムのことも大して知らない。だから、女性が「もの」みたいに扱われていた時代のことも知らないため、ジェンダーを受け入れることが、ある種の人々にとっては、きわめて困難であることに気がついていない。

これから社会を変えていくのはゲイだ。幸い、同性カップルが日本でも認められ始めた。これからはゲイの人を支援していけば、ゲイではない男の人にとっても生きやすい社会へと変わっていくようにも思える。そう考えるのは、楽天的すぎるかなあー。

## 6. 『ハッシュュ!』 (橋口亮輔監督・2002)

そんなわけで、今回は必見の日本映画ということで、『ハッシュュ!』を紹介しておきたいと思う。この年のキネマ旬報の第2位であり、日本でゲイを描いた映画のなかで、間違いなくもっとも評価された作品である。田辺誠一と高橋和也がゲイのカップルを演じていて、これはどちらかといえば、爽やか系ゲイの話である。

もっと濃厚なのが好きな人は、『おこげ』(中島丈博監督・1992)をどうぞ。インテリのマニアの人だったら、『薔薇の葬列』(松本俊夫監督・1969)が絶対的なオススメ。逆エディプスである。